

と稱されて居る。

昔の武士は、鯉より覺悟がよく、最後の立派な事を誇りとして居つた。

支那人にも、歴史上の人物には立派な態度の者が多く、匪賊でさえ最初は哀訴歎願するが、愈々助命の見込がないと悟れば、笑つて刑に就く由で、其覺悟の立派さに係官を驚嘆せしむる位である。

本縣から新潟縣へ轉任した某檢事の談に「信州人は、理屈ぼくて扱い悪いといふが、條理を示して詰問すれば、自ら其の非を悟つて恐れ入る。之に反して、越後人は幾ら傍證が擧つても、却々執拗に自白せず、係官を手古摺らす」と蓋し、兩縣民の性格を如實に語るものである。

弱者の報恩

イツツプ物語に、左の如き寓話がある。一匹の蟻が、水溜りに落ちて溺れかけて居た。小さな水溜りでも、蟻に取つては人間が大河に溺れるのと同じ苦難である。

其處へ一羽の鳩が、水を呑みに來て、蟻の苦しんで居るのを憐れみ、木の葉を咬へて來て蟻の傍へ落してやつたので蟻は木の葉に這ひ上り、一生懸命に水を掻いて着陸し、漸く助かる來が出來た。

鳩は水を呑んで、木の枝に羽を休めて居ると、獵夫が來て、鐵砲で打たうとするのを、蟻が見て恩者の一大事と思ひ、チクリ刺としたので、恰度鐵砲の引金に指を掛けて居た獵夫の狙ひが狂ひ、彈丸が外れた爲め、鳩は危い命が助かつて遙か森の方へ飛んで行つた。

此寓話に似た話が、國史美談にある。

徳川幕府時代の寶永年間、遠州掛川藩の世子松平忠喬は、茶坊主正齊が、手打ちにされる程重大な過失を犯したのを、將來を戒めて許して置いた。

其後、掛川藩に家督争ひのお家騒動が起り、老臣安藤某は、世子忠喬を除かうとして、毒茶を獻じたのを、忠喬が知らずに、茶碗を唇に當てた時、正齊が「茶の色が悪う御座居ますから、お毒見致しませう」と云つて、忠喬の手にした茶碗を取つて、其茶を飲むと忽ち苦悶し始めたので安藤某の悪計が曝露し、忠喬は危難を免れて逆臣を誅罰した。

斯うした美談のある反面に、世の中には亡恩の徒が多く、困つた時だけ、助けて呉れいの、御恩は忘れぬのと、阿諛の限りを盡して合力を乞ふが、一旦利益が伴はぬ立場になると、杜甫の歌へる如く「手を翻へせば雨、手を覆へせば雲。紛々たる輕薄、何ぞ數ふるを須ひん」と云ふ世相であつて、舊知の面上に唾して恬然。昨日の味方が今日の敵となるのも、怪むに足らぬのである。然らば、孔子が「徳孤ならず、必ず隣あり」と曰つたのは、現代に通ぜぬ空論であらうか？

舊恩も情誼も、顧みて居られぬほど、現代の世相は逼迫して居るのであらうか？
他人の世話をして、酬ひを求めようと思ふのは、利益の交換であつて、孔子の所謂徳でない。雇主が使用人に給料を拂ふのは、努力に對する報酬であつて、通り掛りの店から、物品を買ふと同じく、恩でも徳でもない。故に雇傭中の待遇が悪ければ、辭めてから悪口云ふ位は普通である。

只、失業して衣食に窮せる者が泣きついて就職し、乏しい仲から生活の資を得た場合は、全然恩義なしと云へまゝ。

單なる相互的利益の交換であるか。或は格別の恩惠であるか。それは當事者の心の問題で、第

三者には何とも云へぬ場合もあるが、恩に背かれたと稱する者に、徳の至らぬ事がないでもない。
5。

韓退之の求職文に「水火の難に遇ひ、死にかけて居る者があれば平常憎怨の伸でも、彼の死を望む程でなければ、難を冒して救ふ」とある。斯かる救助こそ、仁徳と謂ふべきであるが、力ある者の多くは、一舉手一投足の勞を惜んで他の急を救はず、自己に阿附する者に與へたのを、仁徳の如く考へるから、後に忘恩の憾を感じさせられるのであらう。

兎の捧げ物

演壇に立たされた背徳者の舌が心にもない善行を勧め、我犯せる悪行を秘めて聽衆を戒める如く、我等の筆は偽善の文字を記すではないか。我等は、他人に善行を勧誘する前に、何故それを自ら行はぬか。力がないと云ふなら、持つて居る物だけでも捧げたら何うだ。佛説に、帝釋が山林を巡歴して獸類から貢物を求めた處、皆相應の獲物を捧げたが、兎だけは何の獲物もなかつた

ので、自ら料理の火中へ身を投じて「私の肉を捧げます」と叫んだ——とある。我等は、此無力な兎にも及ばぬ卑劣な心で、自ら惜み乍ら他人に犠牲を勧請する。斯うした矛盾が第一に断ち切られねばならぬ。

愚人と餅

或愚な男が始めて旅をした際、途中で腹が空つたので、飲食店に入つて色々の物を喰つたが、餘程空腹だつたと見へて仲々満腹せず、最後に一つの餅を喰べた處、漸く満腹になつた。其處で勘定を拂ふ段になつて、最初食べたものは、何の役にも立たなかつたから、代は拂はぬ。最後の餅一つで満腹したのだから、其の餅代だけ拂へば充分だ——と主張した。(印度の寓話) 此話の馬鹿げて居る事は、誰にも分るが、之に似た話だと、同じ意味の主張をする者がある。例へば、難病に罹つて、色々の療法を試みても、はかばかしくなかつたのが、是後に或療法で全快した様な場合、初めから其療法を試みれば好かつたと、誰でも云ふ事であるが、何ぞ知らん。最初の療

法から最後の療法まで、順序を追ふてやつたから、漸く効果が現はれたのである。物事には順序があつて、誰でも博士論文が書ける譯でなく、小學校から中學校へと、段階を踏んで上らねばならぬ。それ位の事は、誰でも知つて居ると云ひ乍ら、さて實際問題になると、最終の効果がばかり目指して、準備的努力を認めぬのが、人間の通弊である。

獅子の共産法

今度は、森の王様である獅子が森中の獸類を集めて、共産主義を宣言した「今後森の中の獸類は皆共同で働いて、稼ぎ高を一應持ち寄つた上で分配する」と。其處で、力の弱い兎などは大喜びでピョン／＼飛び廻り、一生懸命働いた結果、さて皆の稼ぎ高を獸王獅子の面前で、分配して貰ふ事になつた。先づ獅子は、一番上等の獲物を取り、次を虎、豹、狼と云つた順序で分配したが、兎の貰ひ分は何もなくなつたので、先づ獅子に不平を述べた處、獅子はたてがみを逆立て「貴様は誰のお蔭で森の中に住んで居れると思ふか。文句を云ふのなら生かして置かぬぞ」と威嚇

したので兎は一溜りもなく縮み上つた。共同事業と云ふものは、智慧も力も平等の者の間に於て始めて圓滿に運用されるもので、智慧のある者となし者と、力の強い者と弱い者とは、この寓話のような結末になり易いのである。アダムスミスの富國論に「各自其天性に適したる最高の職業に従へば、死する共遺憾なし」とある通り、兎は兎として最良の兎たる事を努むべきである。

幸運の指輪

幸運と逆運の極端な例として、ポリケラートの指輪と云ふ物語りがある。

希臘の小國サモスの君主ポリクラートは、生れ乍らの幸運兒で、する事爲す事、凡て豫思外の好結果を得るので、國は富み、一族は榮え、勢威隆々として振つた。

餘り幸運が続くので、ポリクラート自身が、少し氣味悪くなつて餘りの幸運を中斷せんと試みた。

或時、軍艦で地中海を巡遊した際、自分の一番大切に居る大きな綠玉の指輪を、窓かに海

中へ投棄して「之で余の空恐しい幸運が中斷された」と、獨語し乍ら胸を撫でた。

處が、數日後に、珍しい大魚が獲れたと云ふので、漁民から献上して來たのを、料理人が料理すると、魚の胃袋から、何と例の綠玉の指輪が出たのである。

其處で、之を「幸運の指輪」と名づけて再び珍重した。

斯程の幸運者ポリクラートにも臆て逆運の秋が訪れた。

波斯王ダリウスの率ゆる大軍が海を壓して希臘へ攻め寄せた時、小國乍ら勢威充實せるサモス國の軍隊は、異常の幸運者ポリクラート王の指揮に依り、必死に戦つて敵軍に多大の損害を與へたが、衆寡敵せず打ち敗れ、國王は波斯軍の捕虜になつた。

そうになると、猛烈な敵對した文餘計に憎まれて、人民の命乞ひも聞き容れられず、衆人環視の前で磔刑に處せられた。

英國王の故事

中學時代に讀んだリーダーに、こんな物語りのあつたのを、思ひ出した、英國王カヌートが慘

々に戦ひ敗れて敵に追撃され、命からく山間の民家に辿り着き、物置きの中に匿まはれたが、到底再起の見込みがないので、生きて捕虜になるより、自殺せんと決意した。其時、ふと一隅を見ると、一匹の蜘蛛が、一隅から他の隅へ網を張らんとするが、窓から吹き込む風の爲に、折角張つた綱が切れる。それを幾度も繰返して、遂に綱を張り渡し、忽ち小虫を捕へた。此執拗なる蜘蛛の作業を暫時呆然として眺めて居た王は、豁然悟る處があり、勇氣を振り興して再起し、見事勝利を克ち得た。斯うした物語りは、昔から随分傳へられて居り、我國では、小野道風が、柳の枝に蛙の飛び付くを見て發心したと云ふ、有名な話もあつて、要するに、二度や三度の失敗に懲りて見切る様では、何事をも成就し能はぬ——と云ふ教訓である。

四月 フォール

西洋では、四月一日に「エイプリル・ fools」と稱し、罪のない悪戯や嘘言をろうして、友人知己を擔ぐ風習がある。假へば、當りもせぬ勸業債券の當籤祝ひなど催し、招待を受けて集つた

者から會費を徴して「今日は四月一日だよ」と、手を手つて笑ふが如き悪戯をするのである。ゴザムと云ふ地方で、凶作の爲税金を滞納した處、國王が怒つて收税吏を差向け、嚴重に取立てる事になつたので、人民達が評定の結果、一同馬鹿を装ふ事に定めて村外れへ戸を背負つて出迎へた。役人が何うした譯かと尋ねたのに答へて「留守中泥棒が戸を破つて入らぬ要慎に、背負つて出たので御座ります」と役人を呆れさせたのを始め、思ひ切つて馬鹿げた振舞ひをして「ゴザムの人民達は凶作の爲め氣違ひになり、相手に出來ぬ」と思はせ、收税吏の誅求から免れたと云ふ昔話が、エイプリル・フォールの起源である由。人間は、平常眞面目でないと、世間から信用されぬが、時に馬鹿げた悪戯をして、命の洗濯をするのも必要な事で、四角四面な應待では解決出來ぬ難問題も、滑稽な冗談一つで双方の感情が融和して譯なく解決する事もある。

民俗と季節

我國の歳事は、陰曆の季節で定められ、國民は數百年間之を慣行して來たのであるが、陰曆が

廢止されてから、民俗と季節との調和を失ひ、節句やお盆などの歳事が誠に味氣ないものになつた。三月の節句に桃の花も櫻の花もなく、五月の節句に菖蒲がなく、お盆が梅雨頃であつたりしては、何うもビタリとした感じにならぬので、歳事が段々とさびれ、傳統の民俗が廢れ行くのは憂ふべき事である。三月を彌生と云ひ「咲いた咲いた彌生の空に」と、東京音頭で囃立てゝも襟巻に外套の要る寒さでは、踊る氣分にもなれぬし、六月を水無月だの常夏月だのと云つても、漸く梅雨に入つて、毎日蕭條たる雨続きで、水無月處か、實は水増月では、歌にもならぬ。さりとて、陽曆を陰曆に改めよと云ふのではない。傳統の歳事を氣候外れの陽曆でしたの一月遅れでする者もあると云つた區々では、民俗本來の趣旨に沿はぬから、十一月三日の明治節に、運動競技が行はれる如く、歳事と陽曆の季節と合致させて、一齊に舉行する事に改めたらと思ふ。故日下部博士の説に「凡て民俗歳事と云ふものは、最初は必要に基く方便として行はれ、中頃には迷信的習慣となり、終には兒戲になる」とあつたが、菖蒲刀に紙兜の小勇士中から、乃木將軍や東郷元帥や爆彈三勇士の出た事を思ひ、愛國心愛郷心が那邊に於て涵養されるかを思はゞ、兒戲と雖も容がせには考へられぬのである。

犬も喰はぬ

華氏九十一度六と云ふ激暑中、賣藥を飲んで發汗させる苦しさはとても耐らぬが、冷たいものを飲んだり涼しくしたりしては、風邪が癒せぬので、淋漓と流れる汗を我慢する苦しさ。誠に夏の風邪は犬も喰はぬとは好く云つた。

夏の風邪は、冬の風邪のように肺炎等の重態に陥る虞れは少いが、何しろ身體を温めて發汗させる事が苦しい爲、容易に快癒し難いのに弱らせられる。

犬も喰はぬと云はれる代表的のものに、夫婦喧嘩がある。これは可愛さ剩つて憎さが百倍の喧嘩であるから、第三者が仲裁に入つて浮かりした事を云へば、後で双方から恨まれ、飛んだ馬鹿を見ると云ふ形容である。

世の中には、些々たる事で、大した害にもならぬが、放任しても置けず、之を根治するのは容易でなく、痛し痒しの苦みを見る事がある。俗に犬も喰はぬとは、そうした馬鹿げた事を云ふの

である。

梅雨の恩恵

此の空模様では、一點の暗雲もない快晴らしく、日中は餘程暑くなるだらうと、薄い夏服に新調の麥稈帽を冠り、颯爽とした輕装で出掛けると、晝頃は空模様が急變して雨が降り出し、夕方は氣温が降下して、薄着の背筋がゾクゾクする。そうかと思へば、夜來の降雨で氣温が降り、襟元がヒンヤリするので、雨外套や傘の要意までして出掛けると、雨は名残りなく晴れ上つて烈日がガン／＼照り、蒸し暑くて耐へられなくなる。降るかと思へば照り、照るかと思へば降る。浮氣女の心にも譬えられる此頃の天候ほど、人困らせの厄介なるはない。殊に霖雨の爲め山崩れしたり六十年振りとかの豪雨で出水し交通機關を破壊したり、貴重なる人命を奪つて國家に大損害を與へたりするのを見聞すれば、黄河を決壊して良民を泥水に浸けた慘虐極まる××兵みたいに

其無道を呪ひ度くもなるが、然し翻へつて考へると、梅雨のお蔭で田植へも出來、樹木も繁茂するのである。若し梅雨が降らずに、旱魃が続いたら米作は出來ず、忽ち騒動になつて、其被害たるや、到底洪水などの比ではあるまい。梅果成熟する頃、楊子江附近に發生する低氣壓の影響で霖雨が續くのは、豊葦原瑞穂國に天與の恩恵として感謝すべきである。

夏のさま／＼

云ふまいと思へど今日の暑さかな——斯う暑くては、病人が出來て困る。

一寸用事があつて訪問したいと思つても、出かけるのが憶くうになり、汗を流した後では、冷たい生ビールでもキュウと引かけて見たくなる。

冬がよいか夏がよいかと云へば貧乏人には夏の方が凌ぎ易く「楽しさは夕顔棚の下涼み、男はてゝら女は二布して」と、簡易生活は夏に限るが、精神の緊張を缺いて働くのが懶くなり、日影

を求めて休息したくなり、一茶の句にある「もたいなや晝寝して聞く田植歌」の怠け癖がつき易い。

酒呑みを夫に持った妻が、酒代の内から若干宛内緒の貯金をしたのが相當の額になり、夫が病氣になつた際、療養費に役立てたので夫を感激せしめ、斷然禁酒したが其後も生活は樂にならず再び病氣した際、妻に「内緒の貯金はないか」と尋ねたが、今度は酒代をくすねる譯に行かなかつた爲め、貯金出来なかつたと答へた由の笑話がある。

積極政策と消極政策の異ひも、要するに斯うしたものではあるまいか。

米が豊年で安くても、飯の喰へぬ窮民は絶へぬ替り、凶作で米が高くなつても、餓死した者の話を聞かぬが、人間の生活には、餘程の伸縮力があると見へる。

文明は、先づ温帯から發達して寒帯に及んだが、簡易生活出来る熱帯地方は、いつまでも野蠻人の樂園につて居る。

必要に迫はれ、之を得る爲に努むる者でなければ、文化生活の優位は占め能はぬ。

夏の生活は、朝早く起きて爽かなる外氣を呼吸し、朝食をうんと喰べ、涼しい午前中に外出訪

問の用務を済まして晝食は軽く食し、干下りには烈日を避けて風通しのよい室内で榻に倚り、讀書し乍らうつら／＼と午睡を催し、方は行水の後浴衣に着替へ、冷し豆腐を肴の麥酒に双頬を微醺し、街頭に涼風を追ふて散歩する。これが夏の理想生活である。

冬の再認識

冬籠り又寄り添はん此柱——と芭蕉翁の句にもあり通り、嚴冬の小春日和に、南縁の柱に寄り添つて、ウト／＼と居睡りする氣樂な隠者の冬籠りの風景が、舊時代の居には、髣髴と思ひ泛ぶ。雄叫ぶ木枯しの吹き荒ぶ戸外は雪が降り積つて居る冬の夜、炬燵で語る老人の怪談話を聽いて、便所へ行くのが恐くなつた少年時代の思ひ出など、冬に就ての感じは凡そ退嬰的なものであつた。然るに、最近數年來、スキーやスケートなど、冬期のスポーツが流行してから、青年學生は元より中年の紳士や夫人まで、甲斐々々しい防寒服に身を固めて、高原の銀世界や山間の湖沼

へ汗を絞りに行く。少年少女は、雪が降るのを運動會の前夜晴天を祈るのと同じ氣持で、てるてる坊主の替りに雪降り人形を造ると云つた風に、冬の屋外運動を楽しむ様になつた。誠に、冷透せる冬の大氣を呼吸して、惜みなく放射する紫外線を浴び乍ら、高原の銀世界や湖沼の鏡上を、縦横に滑走する愉快さは、炬燵で雑誌を読むより外に仕方のなかつた舊時代の者の知らぬ醍醐味であつて、若人が胸を踊らすに充分の價値がある。幸ひにも、我信州には、菅平や霧ヶ峯、志賀高原等幾多の高原があり、諏訪、野尻、松原等幾多の湖沼があつて、之等近代的の冬季スポーツに好適であるから、單に外客を誘致すると云ふ客引根生からでなく、冬と云ふものに對する根本觀念を改め、冬其ものを新に認識し直すべきである。

天氣豫報

河豚を喰べる時、天氣豫報々々と三唱すれば、中毒せぬと云ふ位當らぬものに譬えられて居る天氣豫報を、信する者が馬鹿だと云へばそれまで乍ら、も少し何とかならぬものかと、つい愚痴が云つて見たくなる。實際、新聞で天氣豫報を見るより、第六感で「明日の天氣は？」と、推測する方が、當る率が場い様である。昔、加賀の老農が白山の雲の模様を見て、天氣を豫測して百發百中するので、江戸へ召された處、江戸から白山が見へぬ爲め、さつぱり當らなくなつたと云ふ話があるが、昔の帆船は、雄の三毛猫を飼つて、猫の第六感を利用して天候を觀測すると、殆ど的中した由である。して見ると、人間の經驗や學問より、動物的第六感の働きの方が靈能的であると云ふ事になる。徳川幕府時代には、浮かり天氣豫報をして、將軍御鷹狩の最中に雨でも降らうものなら、係役人が切腹せねばならぬ爲め、天氣豫報の上申書には「雨降り申し候。天氣にては御座なく候」と書く事に定つて居た。若し雨が降れば雨降り候。天氣にては御座なく候と二

つの文句に讀み、天氣になれば、雨の降る如き天氣にては御座なく候と、一つの文句に讀んで、云ひ譯した由である。聖代の有難さは、幾ら豫報が當らなくても、測候所員の首に心配はなく、天下泰平である。

大震災の回顧

それは、忘れもせぬ大正十二年九月一日の午前十一時五十八分であつた。

其年は平年より暑くて、九月になつても秋とは名のみで、残暑が殊の外酷しかった。

丁度正午前、縣町通りを歩いて居ると、突然足の下の大が「ゴクン」と持上つて心臓に響く様な氣がした！と思ふ間もなく「ドーン」と、午砲が鳴つた。

はて、何だか變だなど、所謂虫が知らしたか。第六感で異常を感じたが、それは次の瞬間に消へ失せた。

間もなく、長野測候所から「今の地震の震源地は、川中島附近の千曲川である」と發表して、

其後當分物笑ひの話題にされた。

夕方になつて、東京が大震火災だと分り、交通も通信も中絶したが、噂は櫛の齒を引くが如く次から次へと語り傳へられた。

翌日は、もう大體の様子は報導されたが、帝都の惨害は意外に甚大で、再建不能だらうと取沙汰され、各方面共、今後何うなる事かと、不安の念に驅られた。

それから、〇〇主義者と〇〇人とが、爆弾を投げつけては、家を焼いて居るとか。飲料水に毒薬を投ずるとか。戸隠の水源地向も、〇〇人が上つたので、青年團員が追跡して行つたとか、相當の分別ある者まで、尤もらしい顔をしてデマを語り、人心はいやが上にも動搖して、皆戦々恟々たる不安の状態に陥つて居た。

それも之も、既に數十年前の昔語りとなり、玄米の握り飯を頬ばり乍ら、精神の緊張を説いた記念會も、其後二三年間催されただけで段々と世人の記憶から遠ざかつて行つた。

天災地變と爲政者

天災地變は、人力を以て如何共爲し得ない不可抗力であるが、昔から之を以て、神が人間に懲罰を下すものと信ぜられて來た。西洋でも、人類を滅亡せしむる大洪水の時、善人のノアに對してだけは、神が豫め啓示して箱船を造らせ、ノアと其一族を助けたと傳へられて居る。支那では天災地變及び凶作を、爲政者の不徳に歸し、爲政者は其責任を痛感して、瀆罪の式を舉行して天神地神に謝したのである。尤も、斯る際は、往々にして、窮民が内亂を起し、不逞の徒輩が政治的變革を企て易いので、寧ろ先手を打つて、爲政者の方が自ら責任を感じ、誠意を披瀝したのは巧妙なる鎮撫策であつたらう。

我國に於ては、地震、雷、火事、親父と云つて、古來不可抗力の標本としたが、近くは大正十二年の大震火災を以て天誅と稱し、天が社會の腐敗墮落を懲戒したのだと言ふ者のあつたのは、矢張り此思想に基くのである。

新婚者と性病

結婚早々、花嫁が性病に罹つて夫婦生活が出来なくなつた爲め實家へ逃げ歸り、夫に對して離婚を求めたが、醫師の檢診を受けた結果、病源は花嫁の方にあつたと云ふ悲喜劇が最近縣下の新聞を賑はしたのは、讀者の記憶に新な事實である。

性病の傳染系統が、接吻及び交接に依るとされる以上、夫婦の何れかゞ、保菌者である限り、他方が如何に健康體でも、感染を免かれる譯に行かぬ。

否、反つて、凡て黴菌と云ふものは、處女體に最も繁殖し易いので、純潔な者が感染した場合には病毒が一層猛威を振ふ由である。

如何なる病でも、罹病の初期に早く治療すれば、全治し易いのであるが、性病は花柳病と稱されて不品行の結果罹るものと即斷されるので、家庭の婦人が冒された場合に於ては、羞恥感の爲め手當を遅らし、嘗に自己の肉體を病巢とするのみならず、災を子孫に遺傳する者が多いのは、

恐るべき事であると、某専門家は語つた。

何んな病氣でも、名譽な病氣と云ふものはないに、性病に限つて特に恥かしかるのは、理由のない事である。

喰へ過ぎて胃病になつた患者が恥かし氣もなく内科醫の門を潜るのに、性病患者が、専門醫の門を潜る事を躊躇するのは、不可解な心理と云はねばならぬ。

最近の新しい見方は、此病氣を花柳病など云はず、家庭病として取扱ふ事である。

而して、結婚前の青年男女に對して、一通りの智識と豫防方法を教習せしむる事が、識者の間に唱導されて居る。

我國の諺に「自惚と瘡氣のない者はない」とある通り、數百年前の足利時代から既に渡來して居たので、不品行ならざる者と雖も病毒の遺傳がないとは云へぬ。

故に、血液の検査其他に依つて病菌の發見に努め、豫防と治療を怠らず、お互ひに子孫の血を純潔にしたいものである。

陳謝の方法

何んな偉い人でも、時に過失を犯さぬと限らず、時には運悪く意外の責任を負はされ、不利益な立場に遭遇する事がある。

斯かる場合、地位あり身分あり社會から尊敬を受ける者ほど、其立場は一層不利益である。

其時、之を償ふ陳謝の方法が拙いと、飛んでもない問題を惹起して、豫想以上の過酷な制裁を受けねばならぬから、苟くも地位あり身分ある者は、斯かる際に於ては充分なる陳謝の誠意を盡す事に心掛くべきである。

電車の中で、一寸他人の足を踏んでも、相手が悪いと酷い目に遇ふ事がある。

此時「何だ之位の事は、お互ひではないか」と考へ易いが、何にして過失は過失であり、他人に損害を與へたからには、歩の悪い立場であるから、下手な理屈を云つて、事件を紛糾せしめるのは、愚の骨頂である。成べく最大級の誠意を披瀝して、直ぐ陳謝すれば相手が悪黨でない限り

圓滿に解決する筈である。

いの字都々逸

近頃の漫才師には、インテリが多く、有名なエンタツやラツキーセブン等は、時事問題に對しても相當の批判力を有し、ユウモアの間に鋭く諷刺する處がある。

漫才師に聞いた都々逸を、紙上に掲げるのも何うかと思ふが、感じた儘に記して見る。

「いろは習ふてはのぢを忘れ、いろで草紙をくらうする」と、全くいろで苦勞するとはぢを忘れる。

「いろのいの字といくさのいの字、どちらのいの字もいのちがけ」は其通り、筆者作「いのち惜んで、ろ命を繋ぎ、はぢをかきく世を渡る」命長うして恥多きを如奈。

やくざの道

蚊や蠅の如き、人生に何の益もなく、煩さくて厄介な害虫でも、衛生設備だけでは撲滅出来ぬ如く、何時の時代にも、やくざと稱する市井無頼が徒があり、良民に指彈され乍らも、法律で取締るでは根絶し難く、社會の一隅に或種の勢力を占めて居るが、俗に臭い物に蠅の多い處は必ず不潔な如く、無頼の徒がのさばる社會は、必ず裏面に何かの不純があると云はれる。即ち、やくざが威力を振ふのは社會制度の缺陷が甚だしい場合であるが、彼等の仲間にも、時には國定忠治や清水次郎長の如き任侠の親分が出て、社會制度の缺陷を補正する事があり、必ずしも蚊や蠅の如き有害無益と限らぬ。やくざの仲間には、仁義と云ふ掟があつて、之に背く者は仲間の屑と云はれて相手にされぬ。普通人の常識では、公私の別があり、假へ私恩に背いても公道を遵守せねばならぬとするが、彼等の掟では、一宿一飯の恩を忘れず然諾を重んじて約束を違へぬ事が大切である。假へば法律道德に反背しても、私恩に報ひねばならぬとする。况や自己の一身や、妻子の運命は何うならうと、親分の爲め又は頼まれた人の爲には、身命を賭しても盡さねばならんとす

る。強きを挫き弱きを扶ける。命懸けを以て、所謂滅私奉公ではないが、滅私報恩に努める。それがやくざの道とやら——と唄はれる。

音を揚げる

闘犬にも、横綱とか大關とかの格があつて、其制覇戦は、とても勇壯なものであると云ふ。敵の急所を咬へて振る。相互に血を流して闘ふが、愈々我慢出来なくなつた方が、イ、ツと微かな音を揚げると、行司が之を聽いて勝敗を決する由である。

比律賓人は、闘鶏を好み、鶏の足に小刀を結びつけて闘はす。其闘ひは實に慘澹たるので、双方血を流し乍ら屈服せず、仲には其場で殺されるものもあるが、假へ怪我はせずとも、音を揚げた方が負けとされる。而して、一旦音を揚げた相手には、二度と向つて行かぬ習性を有すと云ふ。

昔の侠客は、決闘しても相手に最後の止めを刺さぬ習慣であつた。而して、負けた方は、半死半生の目に遇ひ、又は假死の状態にされても、音さへ揚げねば、回復してから、報復も出来るし

仲裁人が入つて和解する際は、五分對等の手打ちも出来るが、若し「助けて呉れ」とか「許して呉れ」とか、所謂音を揚げれば、相手の子分になつて盃を貰ふか、然らずんば草鞋を穿いて土地を賣るかせねばならぬ習慣であつたと云ふ。

闘犬や闘鶏の習性と、侠客の習慣の類似して居るのは、以て奇とすべきであるが、闘争そのものが原始的である爲め、人畜共に同じ原始性を發揮するのであらう。

塞翁の馬

禍福は、綯へる繩の如しといふ例に、塞翁の馬の話が引かれる。

塞と云ふ若者が、落馬して肱を折つた爲め、兵役を免れたが、其後邊境に戦争が起つて、同輩は皆戦死したのに、片輪の塞だけ生き残つたので、悪運の時も「亦好い事がありませう」と愚痴を濡さず好運の時も「亦悪い事がなければ好いが」と餘り喜ばず、徹底した運命觀に依り、一生を無事幸福に暮したと云ふ話である。

顔回の盗食

孔子でさへ、一步譲つたと云ふ無慾の聖徒顔回が、盗食の非難を受けた事がある。孔子が、陳祭の地で暴徒に圍まれて、七日間絶食した際、弟子が脱出して米を買つて來た。それを顔回が炊餐中、一塊の土埃が鍋に入つたので、其儘にして置けば汚いし、棄てるのは勿體ないから、掬つて口に入れたのを、相弟子が見て、孔子に「仁人廉士、窮して節を改るは如何」と問ひ、更に「顔回然り矣」と、盗食の現状を見たとき酷しく非難した。孔子が顔回を質して、其事情が分り「我も斯くせしならんか」と曰つたが、顔回程の人格者でも、盗の誹りを受けた譯である。

貧の盗み

一休禪師の言に「貧の盗みは、罪にして罪に非ず」とあるが、生活に窮した結果、薄給者が小

額の公金を費消したり、外交員が若干の誤魔化しをするのは、善くない事と云ひ^一ら、深く咎める譯にも行かず、處分に苦しむ事である。薄給にして、家に旦夕の蓄へもない者が、愛兒の病氣を醫す爲若干金を要する場合、雇主や親戚知人に頼んでも、所要額を調へる見込がないとすれば勢ひ所管の公金に手る附ける事になり易い。之をしも、業務上の横領罪とすべきか。法律は餘り苛酷に失し無慈悲の非難を免れまい。刑法第三十七條に「自己又は他人の生命、身體、自由若くは財産に對する現在の危難を避くる爲め已む事を得ざるに出たる行爲は、其行爲より生じたる害が、其避けんとしたる害の程度を超へざる場合に限り、之を罰せず」とあるのは、所謂緊急避難權であつて、天災又は豫期せざる偶然の危難を免れる爲の、應急適宜の手段に限られて居る。生活に困ると云つても、飲酒の癖があつたり、分不相應の服裝をして居つたり、家族を怠けさせて置いたりしたのでは、他の同情が割引されるであらう。而して、困るから若干の悪事は仕方ないとすれば、日々の新聞に出る事件は、概ね仕方なしとされねばならぬ事件ばかりで、社會の秩序は保てなくなる。

賣る方買ふ方

賣る者が、賣つて利益を得ると同じく、買ふ者も亦、買ふ事に依つて便宜を得るのであるから賣買の關係は云ふまでもなく、相互的であつて、其間に貴賤の區別がある筈はない。これ位の理屈は、小學校の兒童でも知つて居ようが、さて、實際問題になると、買ふ方の「買つて遣はず」的態度に對し、賣る方の平身低頭して世辭を呈する状態は、何う見ても相互的でなく、主從的關係の様である。我國には、人口に比して小賣商が多く、同業者間の競争が激甚な爲であらうが、一つには、徳川時代に、士農工商の區別を立て、商人を四民の最下位とし、一般に商人、特に小賣商を蔑視した風習があり、それが各地の俚語等にも現はれて居る。此風習が心理的に影響して、現代に至るも尙改め切れず、賣る方の立場を必要以上に低下して居るかと思ふ。其處で、平素自ら屈し、他から蔑視される小商人が、一旦立場を代へて買ふ方に廻ると、平素の鬱屈を晴す積りか何うか、極めて傲慢の態度をする者が多い。筆者は、多年商人の團體に關係して居て、それ等

の實例を數多く見聞したので、屢々愚見を述べて自覺を促したが、習性と云ふものは容易に改め難いと見へる。

天井買はず

機を見るに敏なる相場師仲間に「天井買はず、底賣らず」といふ格言がある。天井買はずとは株式の買方が相場の最高を目標にして買つても八分か九分あたりで手仕舞ひし、最高の十分まで買ひ続けるなどの戒めであり、底賣らずとは、反對の賣り方が、もつと安くなる見込みで賣つても、最底の安値になるより以前に、手仕舞ひをせよとの戒めである。即ち、もつと高くなる見込みで買ひ続けると、相場は天井の最高値段から下落し始め、或は暴落の危険があるから、未だ高くなるよと云ふ見込みでも、八分か九分位の潮時に手仕舞ひして、利益を確實ならしめる。其反對に、安くなる見込みで賣り続けても、最底値に下落すると、今度は騰貴し始めるから、底値になるまで賣り続けず矢張り八分か九分位で仕切つて、利益を確實ならしめ、目前の利に眩惑して、

長追ひする勿れと云ふ事である。

姑射山の老狐

昔、姑射山の麓で、或高僧が連日説教した處、毎日聽聞に来る老翁があつた。或日説教が終へても老翁は歸らうとせず、シク／＼泣くので、僧が譯を尋ねると、老翁は「實は私は此山奥に永年住んで居る老狐ですが、今夜限りの命です」と、亦頻りに泣く。そこで僧が「何故死なねばならぬのか」と尋ねると「私の通る道にワナが掛けてあつた。そして大好な鼠の天ぶらが餌につけてあつたので、歸りにはそれを取らうと思ふのです。ワナが危なくて仲間が大分やられて居ますので、止めようか何うしようかと今迄考へ迷つて居ましたが、あの天ぶらの香氣を思ふと、何うしても餌を取らうと云ふ誘惑に勝てぬので、自分の運命を歎いて居るのです」と答へた。

其處で僧は「人に化ける程の神通力を持ち乍ら、それ程の誘惑に勝てぬのか」と云ふと「それが畜生の淺間しさです」と泣いた。

ワナと知りつゝも、香餌の誘惑に勝つ事が出来ぬのは、ひとり姑射山の老狐のみでなく、人間も又危険と知りつゝ、誘惑に勝つ事の出来ぬ者が多い。

希望のものが眼の前にある。一寸手を伸ばせばそれが取れる様な氣がする。若し發見されたら大變な事になるが……と云ふ様な場合、我等は果して、それを取らうとする誘惑を斷ち得るであらうか。

漱石の「我輩は猫である」の文中に「得難き機會は、凡ての動物をして、好まざる事をも敢てせしむ」とあるが、況んや好める事に於てをや——である。

秘密に就て

秘密のない人生はない。自分は絶対に秘密を持たぬ、と云ふ者があれば、それは自己を偽つて居るのであらう。人間は、誰でも他人に話し得ぬ若干の秘密を、心の一隅に懐いて居る筈である。親兄弟や配偶者や或は親友だけしか話せぬ事柄もあらうし、他人は元より、親兄弟にも絶対

に話せぬ事柄もあらう。斯くの如く、自分で秘密を懐き乍ら、他人の事になると、秘密を探知したいと云ふ好奇心を有するのが、人間の淺間しさである。男女關係に於ても、自分のした事は秘密にして置いて、相手方に秘密の告白を求め、之に應ぜぬと水臭い感じを生じ、圓滿を害する事がある。全く身勝手だと云はれて仕方がない。此故に、利巧な人間は、自分は何等の秘密も持たぬ様な顔をして「公明正大」を語るのである。立憲政治が發達したのは、秘密のない政治を、國民が理想とするからであるが、實際は一種のカモフラージュに過ぎず、秘密のない政治など絶對に行ひ得る譯のものではないと思はれる。

他人の過ちを知り盡して、之を赦し得るものは、聖者即ち神佛である。凡人は、所謂「知らぬが佛」で知りさへせねば、好い氣になつて居るが、生じつか真相を知ると、或は煩悶し、或は憤激して、自分だけでなく、他人の不幸まで招く事になり易いのである。修養の目的は、自分が過ちを犯さぬ様に努める丈でなく、他人の過ちを赦して、恰も過ちを犯さなかつた時と同様に交り得る境地に達するにある。然し、それは口に云ふべくして、心に行ひ得るのは容易でないから、結局知らぬが佛の格言が生じた譯である。

如何に利巧な人間でも、秘密を守り通すのは、極めて困難な事である。何となれば、人間の天性は社會的であつて、社會は一般的の平等を要求するので、公明正大に反する個人的秘密を懐く事は、非社會的であるから、所謂良心の荷責に依つて、心の重壓に耐へ難い感じを生ずるに至るのである。其處で、宗教は懺悔を要求して居る。人間が反省に餘つて、罪を意識するのは、所謂菩提心の發露である。而して、より善き自己を建設する爲には、過てる我を破壊せぬばならぬ。即ち懺悔は過失を破壊する方法である。懺悔には告白を伴ふ。告白なき懺悔は切實さを缺き、過失破壊の効果が薄いからである。然し、中世紀の僧侶が、懺悔の告白を悪用した如く、生存競争の激しい社會人は、往々にしに之を悪用するから、浮かり告白しては一大事が出来る。即ち知らぬが佛の格言を思ひ合せて、告白なき懺悔に、可及的改過遷善の効果を現はす工夫が肝要である。

妻を畏るゝ男

妻を畏るゝ男と云へば、二本棒の鼻たらしで、世間から低能扱ひされて居る者の様に考へられ

るが歴史上で有名な學者や英雄中にもそうした人が尠くない。西洋人が、概して妻を畏怖するのは、米國の漫畫を見ても分るが、希臘神話にある世界の支拂者チユピタア大神も、神妃ヂュノーには全智全能の矛が役立たず、學問の始祖と云はれるソクラテスほどの聖人も、妻に頭から水を浴せられたと云ふ記録があり、露西亞の大文豪トルストイも、妻難を避ける爲め家出したと云ふ事である。支那では、漢室四百年の基礎を定めた高祖劉邦も、糟糠の妻呂后には頭が上らなかつた。晩年愛妾戚氏に溺れて呂后に幸せず、代償に美男の燕を遣はした處、權高い呂后は燕を不敬罪に處して高祖を囚ました。學者で有名な王陽明、明の勇將戚南塘等も、妻を畏怖した記録の保持者である。男尊女卑、亭主關白の位を誇る我國でも、神代岩戸神樂の昔から女ならでは夜が明けぬと云ふ諺さへあつて、英雄豪傑の夫を畏怖せしめた女房がある。九段の靖國神社前に、銅像の建つてゐる維新の英雄大村益次郎は長州藩の醫者であつたが、西洋の兵學を研究して官軍の總參謀長に用ひられた。上野の攻撃に薩軍を黒門口に向けた處、彰義隊が強くて死傷が甚だしい爲め、西郷から「貴君は薩兵を鑿にする積りでござすか」と抗議が出た。大村は泰然として「今日は薩兵は愚か、西郷吉之助の命まで召上げる」と答へた程であるが、外出先から歸宅すると、入

口で門弟に妻君の機嫌を尋ね「今日はお悪い様です」とあれば、「ぢや外へ行つて來る」と家へ上らなかつた由である。元長野縣學務部長たりし某氏は非常に酒が好きで、外出すると荒飲度を失する事屢々であつたが、自宅では決して飲まず、筆者に對して「君の奥さんは禁酒運動などされて居るが、君は何うしますか。僕は家内が八ヶ間しいので、家庭だけ禁酒國にして居ます」と語られた事がある。上田市の有力な富豪で、若い頃天びん棒を擔つて働き、今日の資産を稼ぎ蓄めた某氏が、妻君を畏怖する事は有名な話で、如何なる問題でも、細大洩らさず妻君の指揮命令を仰いでからでなければ決定せぬと云はれる。故に氏を知る程の者は、妻君が同席又は隣室で聽問して居る際になければ、用談を切り出さず、若し同氏單獨の際に話しても、大抵は無駄に終る由で以て妻權の強大さが窺はれる。其他、枚擧すれば尙幾多の例もあらうが、要するに、妻君を畏怖する男、必ずしも低能の鼻たらしばかりでなく、西洋では希臘神話の昔より、支那では漢の高祖、我國では大村益次郎、信州では某成功者と云ふ風に、男性中の傑物でさへ、比々皆然りと云ふ譯であるから、世の妻ノロヂストたるもの大ひに意を強うして可なりと呵々。

何の五千石

一茶の句に「何のその百萬石も笹の露」とあるが、江戸時代の流行歌に「君と寝ようか、五千石取るか。何の五千石、君と寝よ」と云ふのがある。それは五千石の旗本座光寺家の長男源之丞が、吉原の花魁との戀愛を、情死に依つて清算した悲しいロマンスを歌つたもので、「何の五千石」と云ふ句に、江戸つ子魂を現はして居り、一茶の「何のその百萬石も」と云ふヒネタレ俳味と共通の氣分がある。エドワード七世が、一婦人との戀愛關係から、大英帝國の王位を抛つた事は、種々の意味に於て、世界中の問題とされて居るが、戀愛至上主義者から見れば、最高の道徳を實踐した勇者と云ふべく、我等をして云はしむれば、他に妥協の手段もあらうに、誤魔化しをせずして、王位何ものぞと屑く退位した純情に對し、流石紳士國のプリンスなりと讚歎する。

打つた鳥の話

信州の方言に「打つた鳥同様」と云ふ語がある。手に入れたのも同じだと云ふ意味に用ひられる。筆者の友人に、區裁判所の上席検事を勤めた頭腦緻密な狩獵家が居つた。曾つて筆者を戒めて「君は物解りは早いが、少し疎奔でいけない。狩獵家にすれば、取らぬ狸の皮算用をする仲間だが、打つた鳥でさへ、煮て喰ふまでには幾度も手違ひが起る。君のやうに先走つては、屹度大きな手違ひをするに異ひない」と、左の如き話を例に、忠告して呉れた事がある。狩獵家が、山へ行つて樹の枝に留つて居る鳥を見て、銃を向けて狙ひをつける。もう占めたものだ百發百中と思つても、引金を引く間一髪前に、他の方面から狙つて居た狩獵家に打たれる事もあり、運悪く鳥が飛び立つ事もある。打つた弾丸が、狙ひ通り命中しても、獲物が樹から深い谷へ落下して手に入らぬ事もあり、甘く行つて腰の網袋へ納めても、歸りの汽車中へ置き忘れる事もある。さて、獲物は無事に家へ持つて歸り、羽を搾つて俎上に載せても一寸油断して、野良猫に掠はれる

事もある。最後に、小鍋立てをして、酒の爛も恰度よし。箸を執つて鳥肉の煮へ工合を試み、これから喰べようとする處へ、電話で急な公用を傳へて來た爲め、直ぐ出掛けねばならぬ事になり腹を空しながら折角の獲物が、美味か不味かさへ味はへぬ場合もある。斯様に、打つた鳥を鍋へ入れて煮ても、喰べるまでには幾度も障害が起り、最初打てなかつたと同じ結果に終る事がある。沉んや捕らぬ狸の皮に於てをやだ……

創業と守成

唐の太宗皇帝が、或時重臣等に向つて「創業と守成と何れが困難であるか」と問はれた。武將の房玄齡は「初め群雄割據して各死生の間に天下を争ふも誰か克く百戰連勝を期し得んや。只稀有の一人が天運を得て群雄を屈服臣従せしめるのであつて、其困難は言語に盡せぬ」と答へた。文官の魏徵は「昔から、王者の國を創むるや、艱難の間に皆克く成功を收めて居るが、之を亡した者は、皆太平安樂の時であるのを見ても、如何に守成が困難であるか分る」と述べた。之を

我國史に徴するに、天照皇太神の神勅には「豊葦原瑞穗國は世々我皇孫の治すべき國なり」とあるか、國讓りの神事が完了するまでには、幾多の困難があつて、天使を三度も遣はされた上、遂に武力を用ひられたのであつた。神武天皇御東征の困難は、更に一層甚だしく、生駒山の戦ひには御兄五瀨命は戦死遊ばされたが、天皇は種々御苦辛の末に、最後の勝利を得させ給ふたのである。更に守成の困難も、蘇我物部の争ひ、道鏡の不逞、平將門の亂、藤原氏の專横、源平合戦、元寇の來襲、北條足利の反逆、戰國時代の荒廢、維新の開國攘夷論、次で征韓論、西南役、日清日露兩役を経て、今日の支那事變勃發まで、内外幾度かの國難に遭遇する等容易ならぬものがある。

莊子と祀龜

莊子が、川邊で釣をして居ると楚國から仕官の迎へが來たので、使臣に向つて「楚では龜を祀つてあると聞くが、龜は泥沼で自由に泳いで居る事を望むか。殺されて祀られるのを望むか」と

問ふた。使臣「無論自由に泳いで居たいでせう」と答へると、莊子「我も亦然り」と曰つて仕官を断つた。

父と子の問題

母親は勿體ないが騙しよ——と川柳にある通り、無批判盲目的な母性愛は、往々にして不良の子を生み易いが、さりとて「きびしさに父を怖るゝ癖つきて、心弱くも我は育ちし」と若山喜志子の歌へる如く、餘り嚴格過ぎる家庭で何かしらオド／＼といぢけて育つ子も亦「憐れなりける」だ。「母と子との關係は、物理的に證明出来るが、父と子との關係は人倫道德の進歩した社會でない」と精神的にすら證明し難い」と云ふ皮肉屋もあるが、疑ひの餘地なき實父子の間でも、何となく近寄り難い一線が割かれ、最初は紙一枚の隔てから、段々と溝が深まつて行き、遂には重大な社會的悲劇を惹起するに至る例も、決して尠くないやうである。父親の愛は、母親の如き無批判盲目的ではなく、遠い將來まで考慮した深い愛であつても、その心持ちを子に傳へる表情

が、母親の如く直接的ではない。何か子に過失があつて、之を訓戒する場合にも、母親ならば涙を流して泣くとか、愛の言葉を注ぎかけながら搔口説くと云ふ手もあるが、父は睨みつけて怒るだけである。故に子の方でも、母親には近寄るが、父親に對しては、反抗的に頑張る氣持ちが起り「親の心子知らず」の歎を發せしむるのである。

父と子の争ひは、其原因極めて複雑であつて、子の職業に就ての見解の對立、戀愛問題、思想問題、經濟問題其他種々あるが、大抵の場合は、父と子とが腹藏なく語り合ひ、相互の立場を理解し合つた上での争ひは稀で、多くは父親の壓迫的態度と、子の反抗的態度が感情の融和を缺き解決し得べき問題までも、悪化せしめるやうな事になり易いやうである。頃日、「前進座の「逢魔ヶ辻」と題する映畫を見たが、下女の腹に生れた旗本の庶子が、天稟の才能もあり、身持ちを善くして居れば相續出来るのに、名聞にのみこたわつて、眞の愛情を示さぬ父親を恨んで段々不良して行。若し斯かる場合に、母親が教養のある女なら、兩者の感情を融和させるくさびともならうものを、父子の對立關係に於ては、母親の使命が如何に重大であるかと、つく／＼痛感した事である。

御祭禮の變遷

嘗ては、百萬石の加州侯にさへ參勤の道筋を變更させたと云ふ程の傳説的誇りを持つ長野の御祭禮も、年々寂れるばかりである。

日下部博士著「信仰と物理」にある通り、凡そ儀式祭禮と云ふものは、最初必要に因る方便として勵行、終には兒童の遊戯と化する事、東西に其例を見るのである。

或民俗研究家の説に依れば、昔御祭禮が盛んであつたのは、信仰の力で、地方民の團結協和を計つたからである。即ち、御祭禮に際しては、一地方の貧富老若を問はず、費用勞力を分擔して、神に奉仕したもので、若し屁理屈を捏ねて協力せぬ者があれば、神輿を擔ぎ込んで制裁を加へたりする爲平素近所交際の悪い家は、御祭禮の際の返報を恐れた由である。

長野名物權堂の暴れ獅子などは當時の風習の名残りを留めて居るが、市街地に於て此風習が早く廢れたのは、文化の進歩に依つて共存同榮の自治制度が確立したのと、官憲の警備が行届いた

爲めであり、僻陬の地方に於て、今も尙此遺風があるのは、自治制が發達せず、官憲の取締りが緩慢の爲であると思はれる。

殊に、僻陬の地方では、平常娛樂に乏しく、一年數度の御祭禮を樂みとし、出来る限りの奉仕に努めると、文化が遅れて迷信的である爲め、市街地よりは御祭禮に熱心であるが、市街地では、近在からの顧客招致の爲め、宣傳的の意味で祭禮を盛大にした事もあるが、交通機關の整備と、娛樂設備の充實に従つて、最早其必要を認めなくなつた爲め、結局單なる兒戯に化せんとして、東京などでは、兒童が樽神輿を擔いで騒ぐのを見て、御祭禮だなど感ずる者が多い位である。斯くの如く、民俗の變遷を観察すれば、信仰も結局物理の法則に支配される事が推知される。

惠比須講考證

長野市が天下に誇る惠比須講は秋收に依つて懷中の膨らんだ農家に、冬籠りの買物をさせる商略が起源であらうと思ふ。而して、商人の方も歲末に問屋へ支拂ふ資金を得る爲、商品を現金化

する手段として、藏拂ひの安賣りをしたのが、恒例の行事になつたものであらう。

祭神の恵比須様は、大黒様と相並んで商賣繁昌の守り神とされて居るが、大黒様は大國主命を祭り農業及び財政の神様であり、恵比須様は事代主命を祭り、生産漁業及び商取引の神様である。此兩福神は、印度や支那の神佛五體と合せて七福神にも祭られ、何方へ行つても縁起の好い神様とされて居るが、大黒様の方は大國主命と印度の大黒天と云ふ財物を司る神と合體したものであるが恵比須様の方は純粹の國津神で、例の國護りの際、出雲の美穗ヶ關沖へ鯛釣りに行つて居られた神様である。日下部博士の考證に依ると、此兩神は、大國主命でも事代主命でもなく、實は元始宗教の道祖神で陰陽兩性を祭つたものゝ由である。即ち、大黒天が二つの俵に座して、妙な圓形の帽子を冠つて居る格構は男性を表現し、恵比須様が尖つた形の帽子を冠つて居るのは女性を表現し、此兩性を崇めれば子寶を授かると云ふ譯であると。露西亞語で女性を「エビス」と云ふのも、何か因縁があるかも知れぬし、生産の神と云ふのも、考へて見れば理屈に合ふ。實際、如何なる財寶よりも尊い子寶を授ける兩性こそ、眞實の福の神であつて、之を大切にすれば家内安全であるが、之を濫用すれば種々の災害や面倒な諸問題を惹起する事になる。此意味に於

ても、我等は兩神を大ひに尊信崇敬し、恒例の恵比須講を、益々盛んにしたいと思ふ。

故郷へ錦

項羽が、劉邦と競つて秦の天下を亡ぼした時、謀臣の韓生が「天下を定むるには關中に據るのが便利でせう」と勧めたけれど、項羽は肯せず、「富貴となつて故郷を省みざるは、錦を衣て夜行くが如し」と曰つて、故郷楚國の王になつた。人生、功成り名遂げて故郷へ錦を飾る程快心の事はあるまい。

我々では、薩州人は愛郷心が強く、同郷人相惹くと云ひ、長州人も之に次ぎ、俗に薩の海軍、長の陸軍など稱したが、郷黨愛は長州人が遠く薩州人にばぬようである。

郷土と人物

長野市の隣村安茂里は、貧弱な寒村ながら、天下の實業家藤原銀次郎氏の出身地である。藤原

氏が、王子製紙會社の社長として、製紙王とさへ呼ばれたのは、勿論その天稟の才能と、異常の努力とに依るのであらうが、其不遇時代に、郷里の先輩鈴木梅四郎氏の知己を得て、新聞記者の足を洗ひ、三井財閥に用ひられたからで、春秋の筆法を以てすれば實に郷土安茂里村のお蔭とも云ひ得るのである。偉大なる人物を出した郷土は、先輩の指導推挽と、感化誘掖とに依つて、後進を鼓舞感奮せしむるの外、直接間接に、幾多の恩恵を蒙るは、世間一般の通例である。明治時代に薩長兩州から、人材を雲の如く輩出したのも、特に薩長人が優秀な爲でなく、實に郷黨拒絶の賜である。故に成功者は、郷里の爲め何事か報酬する義務を感じ必ず之を實行しつゝある。概して、政界の成功者よりも、經濟界の成功者が郷里に直接の恩恵を與ふる事が多い様である。長州萩の例を見ると、伊藤山縣田中の三首相は、後進子弟の推挽以外、何一つ殘して居らぬが、久原房之助氏は、神社佛閣の修築を始め、學校の増設其他、數百萬圓の寄附行爲に依り、幾多の恩恵を施して居るので、郷黨からは神の如く尊敬されて居る。或時、安茂里村の青年團員が、軍事教練の射的場を新設する爲郷黨の成功者藤原氏に、寄付金を乞ふた處、藤原氏は言下に「地方でも金錢は尊いであらうが、東京でも尊さに變りはない」と曰つて寄附を拒絶した——と、傳へら

れたが、藤原氏の云ひそふ言葉と思はれる。何人の主唱かは知らぬが、藤原氏の壽像を、出身地に建設すると云ふ計畫をされた事がある。然し發起人の顔觸れが揃はなかつた爲中止されたが、實際藤原氏から「左様な計畫は自分の干り知らぬ事で、迷惑千萬だ」との斷り狀が配付された。勿論、自分の銅像を自分で建設の計畫をする者は、餘り例がないから、藤原氏は迷惑に感じられたであらうが、わざ／＼斷る處に藤原氏の面目が窺はれる。兎に角、郷土から偉大な人物を出した事は、郷黨の誇りとすべきであり藤原氏も、杏の實が村民にもたらすより大なる恩恵を、郷黨の爲に與へて、偉大なる人物を生んで呉れた郷土に對し、報謝するところがあつて好い。

信州人の特性

頃日、或皮肉な舊知に遇つた處「ヤア、亦舞戻つたつてね。そんな信州は住み好いかい？」と、揶揄された。筆者が、二度の勤めをする事になつた理由は、そう簡単に説明出來ぬので「サア、それほどでもないが、焼木杭に火が附いたと云ふ形さ」と、軽く應酬したが、その言葉に示

唆されて、信州が果して住み好いか何うかを、考へ直して見る氣になつた。氣候風土や、食糧品等の點から云へば、東京近郊にもつと好い處があり、特に信州が永住に適する地だと思はれぬ。人情類俗の點からは、筆者が從來住んだ何處よりも——と云つた處で、山口縣、福岡縣、臺灣、東京、大阪、比律賓と、轉々した中では、長野が一番安心して住める様な氣がする。最明寺人道の入國記には「武にして健、怯るゝを蔑む」とあるが信州人の特性は、理解力の早い點にある。それになにより安心出来る事は、割合に卒直で、陰險惡辣でない點である。慾を云へば、義俠心に乏しく、理屈が多過ぎて、實行力が伴はぬ缺點はあるが、執拗な處はなく、こちらが下手に出れば、多少拙い事があつても、深くは追求せず、同郷者の間に團結心が稀薄なだけ、外來者が嫌忌されぬと云ふ餘徳がある。信州人の持つ特性中、最も優れたものは、犀利な批判力であつて、筆者の如きも特々「こんな男が何うして斯程の觀察力を持つて居るのか」と、舌を捲く事があつて、それは、信州人の理解力が發達して居るからであつて、此特性は他縣に類がないであらう。信州人は、總じてお世辭が拙くて餘り人を讚めず、おべつかを使ふ者を輕蔑するが、自信が強い人に讚められつけぬから、自分が偶に讚められると、とても喜ぶ。徒つて、信州では、威張る

事が何より禁物でみる。威張る者久しからずとは、信州へ來るお役人の心得て置くべき格言である。

大阪人に學ぶ

關西の操觚界は、大朝、大毎の二大新聞が、斷然飛び離れて居る爲め、大阪時事其他の群小新聞は一般から冷視されて、立ち行かぬので、大阪人獨特のネバリを以て特殊の經濟的經營方法を案出して居る由である。學生時代の友人が、夕刊大阪新聞の重役をして居るので、彼等の經濟的經營方法なるもの、傳授を乞ふた處、呵々大笑して曰く「君にも似合はん事聞かやないか。凡て秘傳云ふもんは、見たり聞いたりした位で役立つ譯のものやない。自分が苦しんで、體得したもんやないとあかんがな」と。夕刊大阪新聞は、輪轉機一臺で八頁の夕刊を發行して居たが、到底收支相償はぬので、種々苦心した結果、考へた事は「高價な輪轉印刷機を、一日一時間餘り動かしただけで、遊ばして置くのは勿體ない事や。之を何とか活用せんとあかん」と云ふ事に歸着し

た。其處で、日本工業新聞と、日本染織新聞を併設して、一臺の輪轉機を三度動かす事に依り、漸く收支相償ふ様にした由である。東京某新聞が、年額六十萬圓の缺損で、幾ら金持の社長を迎へても、永續させぬ爲め、夕刊大阪の重役に經營を相談して來たので、行つて見た處「僕等の社では朝の九時から晩の八時まで、眞黒になつて働いて居るのに、呆れたもんじゃないか。あこの社員は、十時過から出勤して、洋服に刷毛かけたり、髪を撫でつけたりばかりして居る。あんな事して居つたんでは、損するのん當然やと思ひよつた」と。東京の各新聞社が、何れも經營難に陥つて居るのに、大阪の新聞社が、盛に發展進出するのは、斯うした點に、差異がある爲かと思はれる。我等は、大阪人に學ぶ處なくてはならぬ。

彌彦山紀行

柏崎から、越後線で二時間餘り馳つて、彌彦驛着、公園前の蕭洒な旅館へ落着いた。此地は春秋の頃、花と紅葉を見に、新潟や三條邊から遊覽者が來る外、平常は閑寂な處であるが、神代以

來鎮座まします越後第一の彌彦神社に詣づる爲め、一年二萬人以上來訪するので、著名である。神武東征の際、紀伊の國で天照大神靈夢の御劍を奉つて、皇軍の志氣を振起し、戦功を立て給ひたる天香具山命、又の御名を高倉じの命と申す神が、當國に下られて國內を鎮撫し、住民に漁鹽耕種の産業を授けて、彌彦山の東の麓に住居を定め給ふた。之を國幣中社彌彦神社と齊き奉る。神勅に曰ふ「もゝ傳ふ伊夜彦山を彌登り、登りて見れば高嶺には八雲棚びき、麓には、木立神さび落つ瀧津、水音さやけし、越路には、山はあれども、越路には、水はあれども、此處をしも、うべし宮居と定めけらしも」と。神代より神さび居ます彌彦山、げにや越路の鎮めなるらむ——と腰折一首を獻じ奉る。

越後女の氣焰

此附近、地藏堂から寺泊がけて、藝娼妓の産地として知られて居るので、民情を質すべく、宿の女中相手に一問一答を試みる。

筆者「此邊は藝者娼妓の産地と云ふが、娘達が浮氣のせいかね」
文中「いゝえ、娘は嫌がるけど、親が賣るのですがね」

筆者「見渡した處が田も廣いし、海も近いに何故娘を賣るかね？」

女中「生活に困つてですがね。それでも此頃娘を賣るのは呑んでくれる親か、片親なしでなければ、普通の家では、女工や女中に遣つて女郎には賣りません。先月迄茲に居た女中が娼妓に賣られました、それは父親が呑んでくれで、娘は泣く／＼行きました」

筆者「越後の女は肌が好くて、男に惚れぬから娼妓に向くと云ふ話だが」
女中「人を馬鹿にしんな」

筆者「それぢや、越後の女も段々普通の女になる譯だね」

女中「越後女だつて、その様な商賣が好きな者は居りませぬ。貧乏で厄さな親に賣られる孝行娘が多いのですかね」

教育の普及と、文化の進歩とは、越後女の雪の肌を、遊野郎の玩弄にさせなくなつた様である。公娼廢止は、實際問題として、議論の餘地がなくなつた事を、此寒村の女中の意見からさへ

窺ひ知られるのである。それにしても、他の土地と比較すれば、矢張り本場だけあつて、女子の貞操觀念が低く、金と貞操との交換を大して悪い事と思つて居らぬらしい。その替り、越後の女は、單なる戀愛關係で貞操を失ふ事は稀で、大抵金錢關係に伴ふ由である。村に依つては、娘を妊娠させた場合は、二百圓男が出すと云ふ不文律さへあるので、貧乏な男は、支那人と同様、娘達から相手にされぬ譯である。

「ことわりや越後女の冷けきは、雪の肌えの故にこそあれ」長星

越後は美人糸

直江津附近では、眼につくのは女労働者ばかりで、男は何をして居るかと思はれたが、柏崎に來て始めて越後美人が眼についた。宿屋の女中、バスの車掌、書店の女店員、女學生等々、何れも色白の明眸皓齒で、男好きのする顔の持主である。越後人は、女兒が生れれば寶を得たと喜び男兒が生れれば穀潰しと稱し、縁側から蹴落す。此時肋骨の一本位折れても、命冥加に助かつた

のが成長するから、男は肋骨が一本足らぬのだ——と誠しやかに語る者がある。越後に來て、不思議に思ふのは、道端で遊んで居るのも女兒が多く、男兒は餘り眼につかぬ事である。統計上から云つても、女の數が男より多いのは、女子の生存力が強い故であるかも知れぬ。兎に角、越後の女は、顔や肌が綺麗な上、勞働を厭はず、質實で親孝行である。而して、嫁しては夫に貞節で他の男と浮氣をすると云ふ事は、餘りない由である。只、金錢に對する執着力が強い爲、女の大切なるものを、金錢に替へる事を何共思はぬのは、玉に瑕と云ふべきか、瑕に玉と云ふべきか。兼好法師の批評に任す。三條から長岡附近は、藝妓の産地であり、蒲原郡は娼妓の産地であるが、近來娼妓の方は、東北の秋田や山形産に壓倒され、地元にてさへ、土地者よりも東北産の方が巾を利かこて居ると云ふ。「越後出る時や涙で出たが、今ぢや越後の風も厭」と云ふ俗語は、越後人が薄情で、愛郷心の稀薄な事を語つて居る。殊に金錢關係に於て、此感が深い。

五智詣て

早朝、旅館の浴衣の儘で、直江津海岸の五智如來へ參詣した。途中で七八歳の童女が花束を籠

に入れてゆくのに遇ひ、賣るのかと問へば、ハイと答ふ。一把が一錢と云へど、五錢で何把と云ふのか分らぬらしく「お前取つて」と差出す。無邪氣とは斯かる兒を云ふのであらう。五智如來とは、聖武天皇の勅願に依り、天平九年に草創せられた國分寺の一つで、大日、藥師、寶生、彌陀、釋迦の五佛を祀られたのを稱し、由所深き名刹であるが、惜むらくは、數次の火災に遇ひ、本尊も堂塔も焼失し、後年再建されたものである。草花を手向け、燈明を點じて供養し奉り、亡き父母及び先立つた童女二人の靈を弔つた。堂内の一隅に、兒童を先立てだ親達が、冥福を祈る爲、澤山の人形を納めて居る。筆者も二人の童女の爲、人形を納め度いと思つて居るが、未だに宿願を果し得ないで居る。

名古屋所感

名古屋市の誇りは云ふまでもなく、金の鯨鏢と、草薙の御劍を祀つた熱田神宮であるが、佛骨を納めて居る日蓮寺も其一つである。越後人と云ひ、名古屋人と云ひ、何れも現世慾が旺盛で、

人情酷薄なるかに見られて居るが、佛教に對する信仰は想像以上である。つまり、彼等の慾望は現世文では足りずに、來世まで安樂を求めようと云ふ譯であらう。従つて、越後人も名古屋人も大抵本願寺門徒である。現世で何んな邪慾を逞しうしても、寺院へ獻金をして、南無阿彌陀佛を唱ふれば、極樂往生疑ひなしと信じて居る者が、本願寺門徒には随分居る。同じ慾張りでも、越後人は鈍重質實であり、名古屋人は敏優巧慧である。只、ネバリ強い點は兩者共通であり、薄情な點も兩者共通である。越後が、娼妓の本場であつたと同じ意味に於て、名古屋は藝妓の本場であつた。之は兩地人の長所短所及び其共通點を如實に示して居る適例である。而して、破綻前の信濃銀行へ多額の金を貸したのも、越後の銀行と名古屋の銀行とである。之は兩地人の貯蓄心が旺盛で、銀行預金の消化に困り、他縣へ投資して居る證據であると共に、又、一面から見れば、眼前の利に釣られた慾張り根生が窺はれる。北に越後、西に名古屋と、慾の深いネバリ強い兩地と境を接して居り乍ら、信州人は餘りに淡泊に過ぎる。従つて辛抱心がない。又、信仰心が薄い。信州人の氣風は、東の甲州人に似て居るが、甲州人程の冒險心がなく、團結心に乏しい。只信州人の好い處は、聰明で思ひ切りの好い淡泊な點である。

名古屋の三銀行

昭和五年の財界恐慌に際して、破綻した信濃銀行へ多額の貸金があるとの浮説に災され、名古屋の明治、村瀬、名古屋の三銀行が取付に遭ひ、明治と村瀬の兩銀行は支拂停止をしたが名古屋銀行だけは之に耐へて、總預金の七割餘り支拂つた。あともう一割取付られたら、全額の支拂ひには應じ得なかつたが、幸ひに夫れで喰ひ止める事が出来た。と、消息通の談である。而して、休業した明治、村瀬の兩銀行は、資産内容は左程悪くもないのに、一旦失つた信用を回復する事が出来ず、數年後に至るまで、開店休業を續けて居るに反し、取付を喰ひ止めた名古屋銀行は直ちに信用を回復して、其後信銀への貸金も銷却し、今日では隆々たる勢ひで、盛んに營業して居る。七轉び八起きと云ふ諺はあるが、倒れて終へば仲々起き難いものである。起上り小法師が、頭を土に附けても、直ぐ起上るのは轉んでも倒れぬからである。

頭張れ。頭張れ。倒れるな。轉んでも直ぐ起上れ。倒れたら最後樹の枝は折られ、皮は剥がれ

て、再び生回る事は出来ぬであらう。

生活第一主義

さて、越後人や名口屋人と交渉を重ねた結果、彼等の其通せる性格的信條は、生活第一主義である事を知った。彼等には夢がない。ロマンスがない。だから棚から牡丹餅が落ちて来る事を期待せず、自己の力で働いて、生活資料を獲得する事に努める。それが性格的になつて居る爲、エゲツなく感じられるが、決して輕蔑すべきでない。人間は喰ふ爲に生きてゐる譯でないかも知れぬが、生きて行く爲には、是非喰はねばならぬ。故に喰ふ働きの出来ぬ者は、完全なる能力者とは云へぬ。詩を作る事が大切か。田を作る事が大切かと云へば、色々議論もあらうが、飯を喰はずに詩が作れるなら格別、然らざる限り、先づ生活の爲めに働き、而して後に文化向上の爲に盡すのが順序である。

藥草の効驗

戸隠山に生ふる「いかり草」が不老長生の靈藥である事を、昨年の秋新聞で紹介した處、長野市の某實業家が用ひて、宿病の腎臟病を快癒し、其効能の顯著なる事を實驗した。いかり草を藥用にするには、晩春初夏の頃、新緑のものを採取して蔭干しに乾燥し、極上の酒精か燒酎に浸けて置き、約三週間に液汁を絞り取り、之に適量の蜂蜜又は砂糖を加へて、朝夕少量宛を用ゆれば腎を養ひ精根を強めて不老長生の効驗を生ずると、和田三造畫伯の推奨する處である。筆者は、昭和八年の夏、腸閉塞の爲生死の境を彷徨し、一ヶ月間入院治療したが、以後便通を整へる爲め酵母劑を服用し、毎月二三圓宛の藥代を要したが。昨年夏又々再發し、赤十字病院へ入院して、相原博士の診療で膽石病なる事が分り、二週間餘りで快癒したが、昨秋以來藥草「げんの證據」を煎じて服用するに及び、胃腸が健全になり、便通も整ひ、従前毎月二三圓服用した酵母劑よりも遙かに有効なる事を實驗した。いかり草と云ひ、げんの證據と云ひ、何れも原料が安く、一ヶ

月分廿錢か卅錢位で足り、用法も簡易であり、連続服用しても何等の副作用が起らぬから、試みに服用されん事をお奨めする

太田窪の鰻屋

埼玉縣浦和市外に、大田窪と稱する村落があつて、其處に有名が鰻屋がある。

此鰻屋は、農業の片手間に飲食せしめるので、家人が給仕に當り女中も居ぬ程であるが、手料理で喰はす天然鰻の味が、天下一品と云はれ、東京からわざ／＼喰ひに来る客もあつて、仲々繁昌する。

或る休日に、二三の友人と行つた處、満員で二時間も待たされたが、後からと／＼自動車で乗り込む客が絶へず、非常な混雑であるが、家人は悠々として鰻を割き乍ら「遅くなつても宜しかつたらお待ち下さい」と、お茶一杯も出しはせぬ。

そんな繁昌するのを見て、座敷を増築し、人手を増したら儲かるだらうと思はれるが、此農

家の主人は、慾がないと見えて座敷も増築せず、十年前と同様の舊態を守つて居るので、近所に立派な鰻料理の新店が出来て、此農家で謝絶された客を拾つて居るが、その方へは客が少なくて、農家の方へは押すな／＼の盛況である。

滔々たる資本主義萬能の時代に處して、奇妙な繁昌を續けて居る大田窪の鰻屋こそ、昭和七不思議の一つとして、研究を要すべき存在と思ふ。

佛舍利に就て

韓退之の佛骨の表は、儒學者の佛教興隆に對する抗議であつて、如何に痛快に書いた名文でも要するに反動思想に過ぎぬが、一休禪師の所謂「佛は法を賣り祖師は佛を賣り末世の僧は祖師を賣る」の現狀に於て、再讀の價値がある。

聖地エルサレムの橄欖山の石に基督昇天の際の足形と稱ふるのがある。明治時代の傑僧島地黙雷が之を見て「足跡石に入る時は歩々皆地に没すべし。愚民の情思は各國殆ど伯仲す」と喝破し

た。

宗教の生命は、石と木と土とで造つた會堂にあるのではなく、之に依つて具象される精神にある——と、木下尙江氏の熱辯を想起する。

鬼ヶ島異説

汽車中で週刊朝日とサンデー毎日を讀むと、二誌共桃太郎の鬼ヶ島に關する記事が掲げてある。

確か雑誌キングにもあつたが、香川縣の小學校長橋本仙太郎氏が故大隈侯に激勵されて、郷土史を研究した結果に依ると、鬼ヶ島は瀬戸内海の女木島の事で、鬼とは海賊を稱し、其遺跡の洞窟が残存して居り、桃太郎は吉備津彦命の弟稚武彦命で、犬は瀬戸内犬島の住人、猿な讃岐國猿王村の住人、雉子は同じく雉子村の住人を稱し、吉備團子が今岡山の名物になつて居るのを見ても、證據歴然たりと地名や民謡や傳説を引例して考證してあるが、成程と首肯出来る。

讃岐地方に「親に似ぬ兒は鬼子」だと云ふ諺があり、各地に傳へられて居るが、之に就て筆者の思ひ當るのは、當時瀬戸内海に住む海賊が、讃岐の沿岸を襲つた際、婦女子に對して暴行を加へたに違ひない。そして、其後生れた兒で母親の夫に似ず、性質粗暴なのが出來た場合、之を鬼子、即ち海賊の落胤と稱したであらう事は、想像に難くない。斯くてこそ「親に似ぬ鬼子」の眞の意味が判然と推量出来るのである。尙、桃太郎の童話は、讃岐の國守たりし事のある菅原道眞公が故老から海賊征伐の傳説を聞いてお伽話に作られたものであると、之も橋本先生の説である。

家室島の話

瀬戸内海の話の序に、之は雑誌の請賣でない見聞實話を記さう。

瀬戸内海に、山口縣大島郡家室島と稱する小島がある。此島には穀物が出來ぬので、住民は小舟に乗つて近縣へ出漁し、自宅へは盆正月の二度位しか歸らず、港から港へと魚を賣つて衣食の資に替へて生活して居る。

住民の先祖は、壽永の昔平家の落人と稱し、常食に茶粥と云つて少量の米に多量の水を入れ、小袋の中に茶を入れて煎じた粥を食して居るが、あつさりして風味の好いものである。

處が、此島の住人と來たら、極端な儉約で、客があれば粥の米を増さず、水何杓かを増して量を加減する。尤も副食物は釣り立ての魚類であるが、半ヶ年一人の食料として白米一斗を準備し其内五升以上剩せば、辛抱人と云つて親達が娘を嫁すが、剩す量が少いと贅澤者と云つて評判が悪い。

之は三十年前の話であるから、今は何うなつて居るか。風光明媚な瀬戸内海の島々には、傳說的に面白いものが多い。

嘘の効用

眞實を語る者は、常に迫害を覺悟すべき事、彼れ之れと例を引くまでもない。

二人の旅行者が地方のカフェに遊んだ際、甲が女給に「銀座にも比ひない美人」と云つて歡待

されたので、乙は「嘘を云つてもあんなに喜ぶなら、眞實を云つたら何んなに歡待されるかと思ひ「女工みたいな姐さんばかりだね」と云つた處、忽ち逆鱗に觸れ「いゝわよ。イツ」と眼を剝かれた。

盲人や跛足者を「片輪者め」と辱めるのは、「金持を呑ん坊」と罵倒するより罪深い事である。

金持は、反省すれば名譽回復も出来るが、不具者は如何に悲んでも、回復出来ぬから……。

「眞赤なる嘘を吐くのも方便ぞ、白々しいと人は云ふとも『長星』」

屈折の雅致

規格を統一する事の肝要さは、反面に於て、屈折の雅致を忘却してはならぬ。

兼好法師の徒然草に「凡て何事も、一具に整へんとするは拙き者のすることなれ」とあるが、之は必ずしも茶人や閑人の趣味だけでなく、治水築城にも應用される。

支那徐州附近にある開封城は、宋の太祖が築城した時は、歪形の城廓であつたが、後に正方形

に變改した。

處が、敵軍に包圍された際、四方から攻撃されて遮蔽物がない爲、陥落するに至り、今更太祖の深謀遠慮が、追想された由である。亦熊本城は、加藤清正の築城であるが、城を圍る濠はわざと屈折して堀つてある。

それで、水流が一角に當つて、刎返す勢ひで砂を押し流すから、水底が埋没せず、水揚げが好い由である。若し直線又は方形であれば、忽ち流砂が或一角の水底に蓄つて、水揚げが悪くなり、濠は浅く埋没して、洪水等に氾濫を生じ易くなると云ふ。

耕地整理をした道路は、直線で見透しが利き、速力ある車輛の通行には便利であるが、それは雅致に乏しく、刑務所の建物と同様、殺風景である。人生は、刑務所ではないから、家屋建築其他の建設工事には、多少屈折の雅致と、其効用とを考へて、設計して欲しい。

事業と一人の力

基礎が鞏固で、資金の豊富な獨占的専業ならば、敢て手腕のある人物が經營しなくとも、組織

の力で誠實に運用して行けば、大過なく遣れるであらうが、競争が激しくて、經營の困難な事業にあつては、盛衰興廢が或一人の双肩に懸る場合がある。

假へば朝日新聞社とか、毎日新聞社の如きは、誰が經營しても、大差なく遣れるであらうが、經營難の新聞社は社長の個人的經營力が、問題とされるのである。

米國では「新聞社と、ホテルと、私立學校の經營に成功する人は、大統領としても成功する」と云はれる位であるが、我國でも新聞社經營は、最も困難な事業の一つとされて居り、故武藤山治氏の時事新報社、故根津嘉一郎翁の國民新聞社、故野間清治氏の報知新聞社等の例が、雄辯に之を實證して居る。然るに、正力松太郎氏が讀賣新聞社經營に當るや、俄然メキ／＼と頭を擡げて、他紙の衰運を尻目につく朝日、毎日と比肩する盛況を示した。之は業界の奇蹟とさへ驚嘆され、今更ながら難事業の經營に於て、一人の力が無視出來ぬ事を痛感された。

然し乍ら、茲に注意されねばならぬのは、曾て萬朝報の黒岩涙香社長、二六新報の秋山定輔社長、やまと新聞の松下軍治社長等、一人の力で大新聞を隆昌に經營した例がある。然し其の各社は、矢張り一人の興廢と運命を共にした事である。

人間誰か百年の壽あらんや。故に大黒柱一本の力で支へるより、數本の支柱で組立てられた家屋の方が、安全なりと考へられる。

見透しとネバリ

俊敏聰明な人間は、克く前途を見透す事が出来るものである。此見透しが、大體に於て適中するから、大した誤ちがないのである。然し如何に俊敏聰明な者でも、人間である限り、其見透しが利くのは、近い前途の或範圍に止まり、遠い將來の變化まで、見透す譯に行かぬのである。従つて俊敏聰明な者の行動は、近い處を利口に立廻る程度で、遠い將來をめざして、ネバリ強く大成功を期すると云ふ事が少いのは、止むを得ない事である。

假へば、甲乙兩人が、同じ學校を出て、同じ方面に就職したとする。

俊敏な甲は、多分成績も好からうし、仕事もテキパキ處理するので、上役の受けも好いであらう。けれども世の中の事は、青年が夢想して居るやうな譯に行かぬから、甲は間もなく失望を感

ずるであらう。俊敏な彼の見透しでは、到底數年以内に幹部になれる見込みはない。現に今の課長は、大學を出て二十餘年間勤續の老骨である。あの年頃まで勤續して、漸くあれ位の地位に昇進した處で、何になるかと云ふ考へが浮ぶであらう。そこへ他に魅力のある地位が迎へに來ると忽ち轉向する事になり易い。亦そうでなくとも、自分の携はつて居る事業が、不況に沈淪して、幾ら努力しても甘く行かぬ場合など、斯んな事をいつまでして居ても、人生の徒勞であるから、今の内に何とか適當な方面へ、轉向せねばならぬと考へるであらう。而して、甲の見透しは大體に於て、適中する。甲は大過なく、亦従つて大して成功もせず、中位の生活を營んで、人生を終るであらう。これが大體に、俊敏聰明なインテリ階級の與へられた運命である。

乙は、學業成績も下位であつた爲め、就職にも苦勞し、漸く下級の職場を得た。勿論彼と雖もそれに満足して居る譯ではないが、何うしようにも好い智恵が廻らぬので、仕方なく辛抱してゐる。斯くして三年五年と過ぎ、十年十五年も夢の如く過ぎた。其間好景氣不景氣の影響も受けたが、彼は與へられた運命に従つて行くより、外に適當な方策を知らなかつた。彼に出来るのは、馴れた仕事を忠實に繰返して行く事だけである。斯うして居る内に、彼の上役は出世して行く者

もあり、辭める者もあり、死ぬ者さへあつて、新陳代謝し、彼より優秀な同僚も、亦同様の變遷に依つて、漸次少數になり、歲月の經過に伴つて變遷が生じ、變遷のある毎に、彼の地位と収入は増進して行き、初老中老と、年寄つて行くに従つて、彼は會社内でも同業者間でも、社會でも尊敬される立派な者になつた。

偶々、學校の同窓會に出席して見ると、往年紅顔の青年は何れもピン髪に霜を置き、又は禿頭になつて居る。而して往年俊敏を誇つた甲組の連中が、思つた程の出世もして居らぬ事が判り、人生は幼稚園で習つた兎と龜との競争でしかない事が、感得されるのである。

人生に處するに、前途を見透す聰明さは正に必要であるが、然し人間の淺智恵で見透した豫測位で、此永い不可思議な人生の有爲轉變など解る譯はない。そこで古河翁の所謂運鈍根、特に何事もあなた任せのネバリ頑守が、成功の秘訣とされるのである。

運、鈍、根

運、鈍、根とは、明治時代銅山王と稱せられた古河市兵衛翁が、成功の秘訣として垂訓した格

言であるが、此頃になつて始めて此格言の眞理なりし事を痛感する。

いつの時代でも、大學専門學校の優等卒業生は引つ張り風で就職が出来るが、其儘居居つて何十年間勤続した連中が何れも相當地位に昇進するのは當然として、大會社や大銀行へ入つた者で其の擔當事務が餘り低級で在學當時懷抱して居た夢と懸隔があり過ぎる爲、失望して二三年以内に轉出する者が多く、轉出先では高級な地位を與へられる替りに、基礎が薄弱な爲め財界の變動に押潰される危険率の多いのは止むを得ず、従つて最初の間は羽振りが好くて、同窓生に誇つて居た連中が、何時の間にやら社會の前線から影を没するに至る。其頃になると、卒業當時成績が悪かつた爲め、就職難で苦勞した連中が漸くありついた職業を守つて居る内に、鰻上りに昇進して、漸く確固不動の地位を占め、最初景氣の好かつた連中を見返す事になるのである。

勿論運が悪くて、遂に芽を吹かずに萎む者もないではないが、永い間一業に専念辛抱した連中は、中年から晩年までには必ず花を咲かし實を結んで居るやうであり、轉々移動した連中は、花を咲かしても結實を得る事が稀のやうであつて、人生五十功無きをはづると共に、古河翁の格言運、鈍、根の眞理を悟ると云ふ譯である。

捨て石の効用

圍碁の上手な者は、必ず捨て石と云ふ一見無駄な様な石を打つ。處がいざと云ふ場合に、此捨て石が起死回生の効用を齎するのである。

世渡りの道にも之と同じく、平常無事の日、一見無駄と思はれる様な捨て石を打つ事が肝要であつて、或る問題が起つてからあの手此手を考へても役に立たぬ事が多い。

有名な河内山宗俊の臺詞に「平常から醫者、智者、金者の三者に交際つて置けば、いざと云ふ場合に立つ」とあるが、如何なる名醫でも急病になつて擔ぎ込まれては充分な診断が付き兼ねようし、智者と雖も知己でなくては善い才覺も教へて呉れまい。亦金満家に信用を得て置く事の必要は、云ふまでもない事である。

ギリ／＼の生活で、餘力の無い人間は問題外である。苟も生活に餘力のある者は、一見無駄と思はれる事でも、捨て石のつもりで、やつて置く事である。之がいざと云ふ場合に存外の役に立つ事がある。

つ事がある。

事業主と用人法

人を使つて經營する事業の成否は、懸つて適材を適所に任ずるだけの鑑識があるか何うかと云ふ一點に存する。假へ主人や重役が如何に頑張つても、配下の使用人が充分に協力して働くやうにせねば能率は揚がらぬ。

ボートを漕ぐには、先づ人員配置が第一である。三番四番は力の強い漕手を用ひ、一番二番は弱くとも機敏な者を用ひ、五番六番は他の模範となる型の正しい熟練漕手を用ひ、艇長は調子を整へて中堅の三四番に力を出させ、全員一致協力の効果を擧げねば競争に勝てぬ。幾ら艇長が躍起となり三番四番が力漕しても、皆の調子が一致せねば、艇は動搖左右するばかりで、前進の速力は鈍いのである。

處が適材を認めて、適所に配置する事は仲々困難であつて、日常の小役にも立ち、非常の大役

にも立つと云つた人物は稀だから、何か一つの長所があれば、用ひて之を充分に活用するのが明主の鑑識眼と云ふべきである。

世に千里の名馬はあるが、名馬を糟漉の間から見出す程の鑑識ある伯樂はないと云はれる。名馬には概して悪癖があつて、乗り悪いので凡庸の主には用ひられぬ。人間も大役に立つ程の者は使ひ悪いから明主を得ず不遇に終る者が多い。

或時、カーネーギー翁の許へ青年の求職者が來た。翁は努力家だから、日曜日にも休まず働けるかと質問した。青年は暫時考慮して「私は幼時から日曜日には教會に參る事にして居ます。之は亡き母親の遺訓ですから、守り度いと思ひます。折角ですが日曜日にも働く職務は御免蒙りませ」と辭した。其後翁の友人から「正直な會計主任を世話して貰ひ度い」と頼まれた際、翁は直ぐ彼の青年の事を思ひ出して推薦した。此青年は、後に有名な大銀行の頭取になつた由である。

外交員虎の巻

外交員と云つても、所謂ピンからキリまでである。第一相互の某氏の如きは、社長以上の収入を

得た由であるが、終日東奔西走の結果、漸く糊口の資を稼いで居る程度の者もあつて、一概には云へぬけれど、凡そ外交員を職とする者には、左の如き心得が肝要である。

一、風采服装等に注意する事

風采が揚らず服装が粗末だと、玄關拂ひを喰ひ易い。都合よく面會が叶つても、安つぽく評價される。

二、先づ自ら信する事

苟くも、他人に勧誘せんとする者は、其の目的に對して、先づ自ら信するものでなければ、効果がない。人に勧めて置き乍ら、自ら良心の苛責を受くるが如き仕事は、不可である。

三、熱心に根氣よき事

自ら可なりと信する事を、他に勧誘するのであるから、相手が納得するまで熱心に根氣よくやれば、最初不賛成を唱へても、遂に兎を脱ぐに至る事必定である。

四、忍辱の心を養ふ事

外交員稼業ほど、人心の表裏を露骨無遠慮に見せつけられる者はあるまい。玄關子に取次を頼

んで見て、給仕なり女中なりが、奥から返事を齎す際の態度で、凡そ事の成敗は卜知出来る程である。若し鄭重に扱はれるなら、相手が迷惑な顔をしなかつたと察すべく、若し取次の態度が横柄であつたら、相手方が祿な顔をしなかつたものと、覺悟すべきである。而して一度でも、故意の玄關拂ひを喰はされると、其次からは幾ら押かけても取次もせず「只今不在です」とやられる事が多い。斯かる場合忍辱心の修養が出来て居らぬと「馬鹿にしてる」と相手方の非禮冷遇を恨むばかりでなく「外交員なぞ孫子の代までする事でない」と自らを蔑視する悲觀心さへ生じて自棄酒の一杯もあふり度くなるが、忍辱の修養が積めば、如何なる冷遇侮蔑を要けた際でも、憤慨心は起らず「幾ら出世した處で、斯様な冷血漢では氣の毒なものだ」と寧ろ相手方の不徳を憐れむ心さへ生ずるのである。

五、勝ちて奢らざる事

外交員稼業が、甘く行けば利益率が多いから、所謂ぬれ手で粟でも掴んだ氣になつて、濫費し易い。けれども、いつも柳の樹の下に鱸は居らぬと云ふ譬通りだから、勝つて兜の緒を締める要慎を忘れてはならぬ。

佛になる修養を積む聖僧を菩薩と稱し、忍辱の修養は、元より身を殺して仁を施す修養に努める之を菩薩行と謂ふ。

天竺に月蓋と云ふ富豪があつたが、我利私慾に耽つて、慈悲心が少しもなかつた。釋尊は之を憐れんで、自ら月蓋の門に立つて托鉢された。托鉢とは、食器の鉢を持つて、米錢の施與を衆生に乞ひ、其施與で生活する修養であつて、即ち生活を鉢に托すると云ふ意味であるが、勿論貪慾無慈悲な月蓋を、佛法の信者に導かれた。現在信州善光寺の本尊一光三尊の白金佛は、月蓋が寄進したものと傳へられる。

現代の社會にも、幾多の月蓋長者が居るであらう。而して、彼等を自己藥籠中に收めんと欲する外交員諸君は、須らく菩薩の行者が、托鉢する程の覺悟を以て之に當るべきである。

水の五徳

物の本に、水の五徳と云ふのが擧げてある。

一、常に進路を求めて止まず。

二、自ら働いて他を動かす。

三、障害に遇ひて努力百倍す。

四、自ら潔くして他の汚れを洗ひ寛容にして清濁併せ呑む。

五、洋々として巨船を浮べ、發しては蒸氣となり、雲となり、雨となり、雪となり、凝つて氷となり、玲瓏たる鏡の如く澄み、時に濁つても其本性を失はず、常に信を保つ。

たしか、蘇東坡だど記憶するが、大河を舟行する友人に、中流邊で水を汲んで来て呉れと頼んだ處、上流も中流も水の味ひに異ひはあるまいと、好い加減に汲んで行つた處、それを一口呑んで見て「上流で汲んで来ただらう」と云ひ當てたので驚いて聞くと「上流の水は荒く、下流は濃過ぎる。中流の水が一番美味い」と答へた由であつた。然し、支那は水の乏しい地方が多く、洗面の水を順々に使つた上最後は豚に飲ます程大切にす。例のパールバックの「大地」にも花嫁を迎へる息子が、三年振りに行水するのを、父親が「雨模様もないに水を使ふな」とたしなめて居る位である。吉川英治の隨筆にある通り「茶人は元より田夫野人すら、水の美味さを飲み分け

得るのは、日本を措いて外にない」と云はれるほど、水に恵まれた我等日本人は幸福である。

酒と煙草

「酒と煙草は養生に害あり」と昔の庭訓往來に書いてあり、それ位の事は醫師に聞くまでもなく誰でも知つて居らうが、米屋より酒屋が繁昌し、藥屋より煙草屋が多いのが、社會の實際である。禁酒禁煙は出來ても、之を適度に節すると云ふ事は、出來難いと云はれるが、禁酒禁煙の誓ひも、大抵三日坊主に終る事が多い様である。蜀山人が、禁酒を誓つてから間もなく飲んで居るのを友人が見て咎めた處、山人は即座に「我禁酒破れ衣となりにけり、ソレさして呉れヤレついで、呉れ」と讀み乍ら盃を差出したので、大笑ひしたと云ふ話がある。筆者は、三十歳から飲酒し始めたが、宴會以外飲まぬので、別段禁酒する程の害も認めぬが、煙草の方は最近始めたに關せず、毎日兩切十本以上を喫ひ、何うしても節煙出來ぬ爲め、ポケットマネーの點から弊害を悟り五月限りで斷然禁煙を決心した。若し意志が弱くて再び喫ふ様な事があつたら辱知諸君に笑はれ

ても仕方ないと思つて之を記す。

酒の六失

牧水の酒歌を始め、酒は愁ひを拂ふ玉箒とか、天の美祿、般若湯など稱して、禮讚愛飲されて居る一方には、其弊害を説いて、之を排斥する説も尠くない。十八史略には「聖人禹が儀狄の作つた酒を飲んで酔ひ、之は甘いから、後世必ず酒に溺れて其爲に國を亡ぼす者があらうと、儀狄を疎遠した」とあり、後漢書には「金を試みるに火を以てし、人を試みるに酒を以てす」と記され、何れも誘惑の具として、之を排斥して居るが、畏阿含經に其六失を擧げて居るのは、簡明且具體的な禁酒論である。曰く、

一、には財を失ふ。

二、には疾を生ず。

三、には争ひを生ず。

四、には惡名を流布す。

五、には怒を暴發す。

六、には日に智恵を損す。

淨瑠璃の「義經腰越狀」は、灘波戰記、即ち大阪陣を材料にして居るが、五斗兵衛を召抱へるに際し、重臣の泉三郎が酒を飲ませて、人物を試験した。五斗兵衛は正體もなく亂醉の結果、女房子にまで愛想を盡かされるが、鐵砲の音を聽いて正氣づき、勇士の本領を發揮するので、泉三郎が「それほどの豪傑が何故酒に心を亂したか」と問へば五斗兵衛は「好きと知つて侷むる酒を飲まざるは卑怯に似たり」と答へる。現代の青年は、就職試問に酒を飲むかと問はるれば、大抵「飲みません」と答へるであらう。然しそれは嘘偽の場合が多い。五斗兵衛は、好きと知つて侷められたので、試みとは承知し乍ら男らしく飲んだ。飲めば酔ふ。酔へば醜體も演ずる。夫れが人間味であつて、彼の卒直な性格が好ましく感じられる。

忠臣藏の師直は「酒は飲んでも飲まいでも、勤むる處はちやんと勤むる」と曰つたが、由良之助は力彌に向つて「酒は飲めども熱湯の如し」と語つて居る。平賀源内が之を評して「飲酒の習

慣ある者が、酒を飲んで熱湯の如しと云ふのは偽りである。幾ら忠臣義士でも、酔つて遊興すれば面白いに違いないが、それに溺れずに、仇討ちの目的を達した事が偉いのだ」と云つたのは至言である。

牧水の酒歌

飲酒一斗、詩百篇の酒仙李白を髣髴せしめた故若山牧水は、酒杯を手にし乍ら名歌を詠んだものであるが、小諸町藤村庵の楯間には牧水酔中の作になる「酒歌五首」が掲げてある。

「人の世にたのしみ多し然れども酒なしにして何のたのしみ」

「それ程に甘きかと人の問ひたらば、何と答へむ此酒のあぢ」

「さびしみて生ける命の唯一つの道づれとこそ酒を思ふに」

「時を置き老木の零落つること、静けき酒は朝にこそあれ」

「白珠の齒にしみとほる秋の夜の酒は静かに飲むべかりけり」

温温禮讚

今更、温泉の効用を説くのも妙であるが、此頃つくづく感じたのは、最近數年間絶へず温泉へ入浴して居るせい、鼻風一つ引かぬ事である。以前、長野に常住して居た頃は餘り温泉へ行かなかつたが、東京住ひする様になつて、温泉の有難さが解り、此頃では温泉浴を何よりの慰安と感じて居る。

「静かなる山の温泉は朝ぼらけ、未明に獨りひたるこそよき」

「眞晝どき浮世の塵をよそに見て、山の温泉にひたるのどけさ」

「夜更けて寝られぬ憂ひさまくの、悶へは山の湯に流せかし」

—長 星—

慣ある者が、酒を飲んで熱湯の如しと云ふのは偽りである。幾ら忠臣義士でも、酔つて遊興すれ

著者略歴

小笠原幸彦 〓 號長星 〓 明治廿二年九月廿八日、長州萩市に出生、浦和中學校を経て早大英法科卒業、比律賓大學研究科に學ぶ、長野商業會議所書記長（理事）就任、大正十三年十月信濃日日新聞主筆兼副社長となり操觚界に奉職する事前後二十數年、此間昭和三年秋御大典に際し新聞通信事業功勞者として地方饗餐の榮に浴す、長野地方裁判所人事調停委員囑托、昭和十四年九月新聞事業統制に依り信濃毎日新聞に合併、爾來著述及出版業に従事。風雪社書房を經營す。

昭和廿三年一月十九日印刷
昭和廿三年一月廿五日發行
昭和廿三年五月二十日再版印刷
昭和廿三年五月廿五日再版發行

世相諷話



定價五拾圓

著者 小笠原長星

東京都中野區本町通五丁目十九番地

彌榮出版合資會社

發行者 代表社員 小笠原幸彦

日本出版協會 會員 番號 A 二二五〇五三

印刷者 東京都豊島區巢鴨七丁目一六六二番地 文林堂印刷株式會社

發行所 東京都中野區本町通五丁目十九番地

彌榮出版社

東京都中野區本町通五丁目十九番地

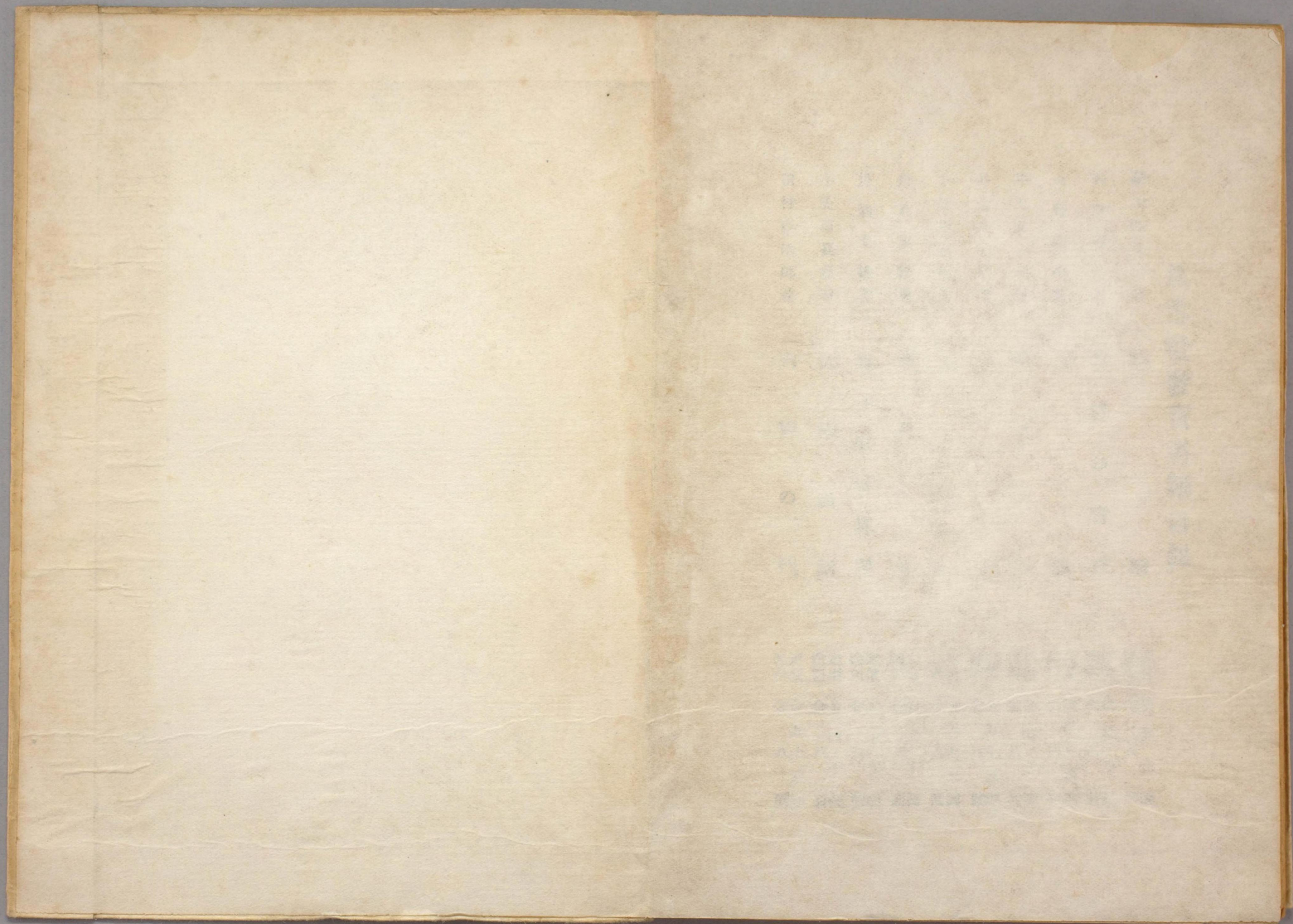
發賣所 風雪社書房

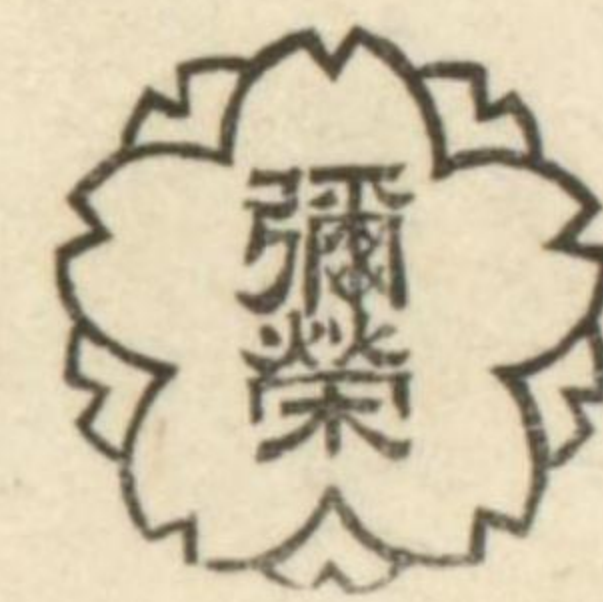
電話中野(38)二一九七番
振替東京四七五一一番

割當事務庁
讓渡圖書

風雪社發賣書籍目錄

織田作之助著	妖婦	送料價	金	四	十	圓
石川達三著	智慧の青草	送料價	金	五	十	圓
火野葦平著	花扇	送料價	金	四	十	圓
井上友一郎著	湖南少女	送料價	金	四	十	圓
井上友一郎著	ハイネの月	送料價	金	五	十	圓
小笠原貴雄著	ゴゴリ喫茶店	送料價	金	五	十	圓
丹羽文雄著	理想の夫	送料價	金	六	十	圓
丹羽文雄著	鬼子母神界限	送料價	金	七	十	圓
小笠原長星著	世相諷話	送料價	金	四	十	圓
田村泰治郎著	肉體の門	送料價	金	五	十	圓





風
雪
社
書
房

彌^ヤ榮^{サカ}出版社發刊